

新発見の川田順書簡一通(上)

——「死に損ねが生き損ねをせぬやう……」——

鈴木良昭

一 一通の新発見書簡をめぐる 賀正

その後御無音申上候処、おかげにて小生心身共に元氣を取戻し近年にない心持にて新春を迎へ申候 此上は 死損ねが生き損ねをせぬやうに、努力工夫いたすべく候、その一つとして居を東京方面に移すこと決心いたし候 三月頃から御近く成れると楽しみ居候

去月御紹介下されし主婦之友の高下氏へ短歌少々おくり置き候 同誌へは 鈴鹿俊子が感想文を書かされ候 二月号に出るよしに候 貴言に従ひ、朝日と主婦之友以外には当分成るべく書かぬやう致し度候へども、時が時、事が事とて、いなみ難く他へも少々出すかも知れず候、もちろん不名誉の事を吹聴するやうになるのはつゝしむべく候

五島君、去月末ちよつとまゐりいろ／＼話き、候、小生も今後

は大兄の如く、いはゆる歌壇つきあひはし度くないと思ひ候、(尤も 歌壇の方でも幸に相手にせぬかも知) もつと広い世界へと志すべく候 もちろん歌を中心にして、

無想庵から「常に廿歳」といふフランス語を書いて、青年順をヒヤカン? 来て候 小生としては命がけの真剣極まる事に候へども、第三者から見ると、何分にも七十才に近い翁といふので、ユーモラスに感じるらしく候 苦笑に不堪候 奥様御子達へも

くれ／＼もよろしく

正月五日

六十八翁 順

第二郎 詞宗

(封筒)

△表△横浜市金沢区寺前町二二三

尾山第二郎兄

△裏△正月五日

・消印24・1・5

三月廿三日
 三月廿四日
 三月廿五日
 三月廿六日
 三月廿七日
 三月廿八日
 三月廿九日
 三月三十日
 四月一日
 四月二日
 四月三日
 四月四日
 四月五日
 四月六日
 四月七日
 四月八日
 四月九日
 四月十日
 四月十一日
 四月十二日
 四月十三日
 四月十四日
 四月十五日
 四月十六日
 四月十七日
 四月十八日
 四月十九日
 四月二十日
 四月二十一日
 四月二十二日
 四月二十三日
 四月二十四日
 四月二十五日
 四月二十六日
 四月二十七日
 四月二十八日
 四月二十九日
 四月三十日
 五月一日
 五月二日
 五月三日
 五月四日
 五月五日
 五月六日
 五月七日
 五月八日
 五月九日
 五月十日
 五月十一日
 五月十二日
 五月十三日
 五月十四日
 五月十五日
 五月十六日
 五月十七日
 五月十八日
 五月十九日
 五月二十日
 五月二十一日
 五月二十二日
 五月二十三日
 五月二十四日
 五月二十五日
 五月二十六日
 五月二十七日
 五月二十八日
 五月二十九日
 五月三十日
 六月一日
 六月二日
 六月三日
 六月四日
 六月五日
 六月六日
 六月七日
 六月八日
 六月九日
 六月十日
 六月十一日
 六月十二日
 六月十三日
 六月十四日
 六月十五日
 六月十六日
 六月十七日
 六月十八日
 六月十九日
 六月二十日
 六月二十一日
 六月二十二日
 六月二十三日
 六月二十四日
 六月二十五日
 六月二十六日
 六月二十七日
 六月二十八日
 六月二十九日
 六月三十日
 七月一日
 七月二日
 七月三日
 七月四日
 七月五日
 七月六日
 七月七日
 七月八日
 七月九日
 七月十日
 七月十一日
 七月十二日
 七月十三日
 七月十四日
 七月十五日
 七月十六日
 七月十七日
 七月十八日
 七月十九日
 七月二十日
 七月二十一日
 七月二十二日
 七月二十三日
 七月二十四日
 七月二十五日
 七月二十六日
 七月二十七日
 七月二十八日
 七月二十九日
 七月三十日
 八月一日
 八月二日
 八月三日
 八月四日
 八月五日
 八月六日
 八月七日
 八月八日
 八月九日
 八月十日
 八月十一日
 八月十二日
 八月十三日
 八月十四日
 八月十五日
 八月十六日
 八月十七日
 八月十八日
 八月十九日
 八月二十日
 八月二十一日
 八月二十二日
 八月二十三日
 八月二十四日
 八月二十五日
 八月二十六日
 八月二十七日
 八月二十八日
 八月二十九日
 八月三十日
 九月一日
 九月二日
 九月三日
 九月四日
 九月五日
 九月六日
 九月七日
 九月八日
 九月九日
 九月十日
 九月十一日
 九月十二日
 九月十三日
 九月十四日
 九月十五日
 九月十六日
 九月十七日
 九月十八日
 九月十九日
 九月二十日
 九月二十一日
 九月二十二日
 九月二十三日
 九月二十四日
 九月二十五日
 九月二十六日
 九月二十七日
 九月二十八日
 九月二十九日
 九月三十日
 十月一日
 十月二日
 十月三日
 十月四日
 十月五日
 十月六日
 十月七日
 十月八日
 十月九日
 十月十日
 十月十一日
 十月十二日
 十月十三日
 十月十四日
 十月十五日
 十月十六日
 十月十七日
 十月十八日
 十月十九日
 十月二十日
 十月二十一日
 十月二十二日
 十月二十三日
 十月二十四日
 十月二十五日
 十月二十六日
 十月二十七日
 十月二十八日
 十月二十九日
 十月三十日
 十一月一日
 十一月二日
 十一月三日
 十一月四日
 十一月五日
 十一月六日
 十一月七日
 十一月八日
 十一月九日
 十一月十日
 十一月十一日
 十一月十二日
 十一月十三日
 十一月十四日
 十一月十五日
 十一月十六日
 十一月十七日
 十一月十八日
 十一月十九日
 十一月二十日
 十一月二十一日
 十一月二十二日
 十一月二十三日
 十一月二十四日
 十一月二十五日
 十一月二十六日
 十一月二十七日
 十一月二十八日
 十一月二十九日
 十一月三十日
 十二月一日
 十二月二日
 十二月三日
 十二月四日
 十二月五日
 十二月六日
 十二月七日
 十二月八日
 十二月九日
 十二月十日
 十二月十一日
 十二月十二日
 十二月十三日
 十二月十四日
 十二月十五日
 十二月十六日
 十二月十七日
 十二月十八日
 十二月十九日
 十二月二十日
 十二月二十一日
 十二月二十二日
 十二月二十三日
 十二月二十四日
 十二月二十五日
 十二月二十六日
 十二月二十七日
 十二月二十八日
 十二月二十九日
 十二月三十日

京都市北白川小倉町五〇

川田順

○ 右の書簡は昭和五十九年の春、さる書店を通して入手したもので、すでに資料紹介という程度に二回ほど（五十九年五月八日付毎日新聞八部分▽、同年七月号「短歌現代」八全文▽）取り上げられているが、今回、横浜国立大学石井茂教授から、同学会誌にさらに調査補足して発表するようにとの要請を受け、ここに寄稿する次第である。（紙幅のつごうで、今回はその前半だけを掲載。）

若き日の恋は、はにかみて

おもて赤らめ、なまかり壯子時の
四十歳よそぢの恋は、世の中に

かれこれ心配くはれども、

墓場に近き老いらくの

恋は、怖るる何ものもなし。

終戦後まもない昭和二十三年十一月三十日、歌人の川田順は、新村出、吉井勇、谷崎潤一郎ほか多くの友人、知己に「遺書」を送り、同時に遺稿として原稿用紙四十枚ばかりの「孤悶録」なる心境告白記と「恋の重荷」なる長詩を、東京朝日新聞の嘉治隆一出版局長に届けて自殺を図った。右の詩は、その時の嘉治局長に宛てた長詩の「序」である。

結局、自殺は未遂に終わったのであるが、その原因は、歴とした夫、子のある女性との恋に苦悶懊惱し、死によって自らの責任を果

とができ、晩年の順を理解する上で貴重な材料を提供してくれているとも見られるからである。

そこで、以下短歌史研究には全くの門外漢ではあるが、書簡所持者としての立場から（あるいは責任上と言ってもいい）、この書簡にかかわるところを若干説明しておきたいと思う。

まず、「東帰」を決意するまでの経緯、すなわち「老いらくの恋」のあらましから述べることにする。

二 「老いらくの恋」の芽生え

樫の実のひとり者にて終らむと思へるときに君現はれぬ

『東帰』（昭二七）前半の中核をなす相聞歌「裸心」の中の一首。「裸心」は、昭和二十二、二十三兩年の歌を収めたもので、右は二十二年作の部。五月頃の詠歌と推定され、歌中の「君」が俊子である。

順は昭和十四年十二月、最愛の妻和子を脳溢血で亡くし、翌十五年十一月、兵庫御影町六甲山麓の「山海居」から、京都市左京区北白川小倉町の養嗣子周雄（実の甥。英文学者。京大教授、退官後は甲南大教授）宅隣に新築した「夕陽居」に移住し、そこで、「ひとり者」で終えようと思っていた。そうした時に「君」が「現はれ」たというのである。

××さんとの交渉を回想する。五年ほど前の初夏某日、東山の島華水先生の邸で初めて偶然同席した。「××君の奥さんだよ」と先生が簡単に紹介せられた。「美しい女性だ」といふのが私の

第一印象であつたが、それだけのことで、他日宿命的の愛人になるものとは夢想さへしなかつた。（死脉）³⁾

（文中、「××さん」とあるのが俊子で「××君」が中川与之助。「島華水先生」とは英文学者島文次郎博士のことで、俊子の夫の中川博士の元同僚。）

俊子と初めて会った時の場面の回想である。

順は、自殺未遂事件後、前述の「孤悶録」に、一部訂正や補筆をして、これも前記「恋の重荷」と、さらに事件前後の身辺状況を随想風にまとめた記録五篇、それに短歌二一四首を加えて単行本としての『孤悶録』を二十四年三月朝日新聞社から出版する。右の「死脉」はその中の一篇である。……「五年ほど前」とは昭和十九年頃にあたり、この点については、俊子も『随筆——愛と死と』（昭四五、読売新聞社）の中で、「昭和十九年五月下旬のある日、近くに住む私は、島夫人の熱心なおすすめで初めてその家に行った。夫人の案内で階下の部屋に入ると、川田がすでに来ていて島博士との話はずんできていた」と書いている。そして、まもなく彼女は順の歌の弟子となる。以後、二人の間の往来は急速に繁くなっていくのである。そうして遂に、

昨年五月の某日、遂に抑制することが出来なくなつて、愛情を打ち明けると、××さんは受入れてくれた。「宿命」の手が表面に出て来たのである。「主人にすみませんが、致し方ありません」と再三言つた。私の強い愛に負けたといふ姿であつた。（同前）というように発展する。「昨年」とは二十二年のことであるから、

初対面から丸三年経たことになる。とうとう堪えきれなくなつて愛を告白した、というのである。

いつよりか君に心を寄せけむとさかのぼり思ふ三年四年を

「安楽寿院」『孤悶録』中の一首。右は、そのような「君」への愛の心が一体いつごろから芽生えたものなのか、逢い初めてからの過ぎ来し方の「三年四年」を振り返り「思ふ」ているのである。

昭和二十三年五月の某日、二人は洛外の白河・鳥羽両院政時代の城南離宮の一角に建てられた安楽寿院を訪れる。初めての遠出であった。俊子の帰宅時間を気にしながらの束の間の逢瀬ではあったが、互いの心に言い知れぬ喜びと安らぎを覚えるしずかな一日であった。「安楽寿院」はその時の思い出を綴ったことになっているが、実は思い出し冒頭の一部だけで、大半はそれ以後の身辺記録である。

「いつよりか」は、その終りの方に置かれている。歌に続けて、「そもそも私の心は何時頃から××さんと交渉を持ち始めたのであらうか」と振り返り、前掲「死脉」の二十二年五月の愛の告白のことに触れ、「愛そのものの芽生え」を実際に「さかのぼり」記してみているのである。そこで、以下少し引用が長くなるが、順の微妙な心の軌跡をその文面にたどってみよう。

私は一昨年廿一年の二月から、東宮御所に伺うため、殆ど毎月一回上京した。昨廿二年正月下旬東京から帰つて来ると、詠草を携へて来宅した彼女は「先生が京都を離れて御旅行なさると、お帰りになるまで私はさびしいんです」と言つた。彼女は師弟の間柄の温かさでさう言つたに相違ないのだけれども、私の心耳へは、

もつと異なつた深い意味の声であるかの如く聞えた。私は幾歩か彼女へ近づいたのである。もつと遡る。廿一年の七月某夜、彼女の主人××博士を訪問すると、「数日泊りがけで一緒に淡路島へ行きませんか」と誘はれた。そこで淡路行の相談をしてゐると、傍にゐた彼女は「私も行き度いんです」と極めて無邪気に、子供が駄々をこねる時のやうな態度で、博士にせがんだ。私と一緒にらば作歌の臨地教室をしてもらへるからと考へた故にちがひない。博士は当惑したやうに笑つたが、彼女は熱心に主張する。「奥さん、おやめになつた方が宜しいでせう。婦人がまじるとお酒をいただくにも遠慮しなければなりませんからね」と私は笑ひながらなだめたが、その時、私の心は無意識の裡に彼女へ引かれた。さらに遡る。廿年の末頃に生活社の叢書の一つとして「寸歩抄」といふ極めて小冊子の拙歌集が出版された。彼女へも一部贈与すると、「これはふところに入れ、どこへ行くにも放しません」と彼女は言つた。その時、私の心は彼女へ寄つて行つたにちがひない。おなじ年の秋の夜、来宅した彼女の帰りを送りながら、一緒に疎水の岸を歩いたが、美しい月明であつた。数日して彼女が見せた詠草の中に、その月夜の忘れ難いことが歌つてあつた。さらに遡る。その前の年（十九年）の盛夏の日、既に灼熱を感じる午前十時頃、疎水の下の道路で彼女に行きあつた。白いワンピース・ドレッセスを着て氷のかたまりを重さうに片手に提げてゐた彼女は、若若しく綺麗であつた。「お宅へ伺ひませう」と私は彼女について行つた。既に何かしら引かれてゐたのであらう。結局、遡

つて初対面の時まで行つてしまふ。十九年五月某日、初めて彼女と同席した時に、互ひの心には何等意識しなかつたけれども、「宿命」が仲介の役をつとめて傍に坐つてゐたのだ。

このように、その時々々の交渉の場面をひとつひとつ鮮明に浮き上がらせ、「さかのぼり」考えている。

——結局十九年五月、島邸での初会の場面に行き着くことを思い、それを「宿命」が仲介の役をつとめて傍に坐つてゐたのだ」と悟る。「宿命」が、無意識裡に彼女を「意識」させていた、というのである。

三 恋の発覚と懊惱

橋の上に夜深き月に照らされて二人居りしかば事あらはれき「裸心」(二十二年の部)の中の一首。歌意は説明するまでもなく、二人の關係が発覚したことをさす。それを「死脉」では、

七月の夜ふけ、疎水の板橋にかがみ、二人で満月を眺めてゐると、折しも外出先から歸つて来た博士に見つけられた。さすが寛容の博士も、二人の關係を直覺して心頭に怒りの火を発したらしい。秘密は露頭した。

と。まさに衝撃の場面であるが、実はこの時のことは中川博士も次のように記している。

午後八坂に於ける学友達との会合に臨んで十時頃歸つて来た。家の近くの橋の上に、折からの月光を浴びて嘯々と語りつつある男女の姿が目にとまつた。先方も私の姿をみて驚いたように立ち

上った。それは川田氏と俊子とであつた。(中略)今日の前にした二人の行動、川田氏のそわそわした態度、いよいよその關係の並々ならぬことが察知された。

これは後のことになるが、中川博士は俊子と別れたのち、二十四年三月『苦惱する魂の記』(山口書房)と題して「事の起り」から「約五百日……夫として、又子供の父として如何に悩むものであるかを赤裸々に書きつけた」記録を公刊する。それは「一体何故にかようなことが起つたか、それはどのような経過を通つたものか、又現在どのような状態にあるのか等々を詳細に探究して、その上で善後策」を講じる必要があつたからであり、そして、なおこの問題は「個人的問題であると同時に多くの社会問題を含んで」と信ずるから、本来は秘しかくすべきことも敢てこれを公刊した」というもので、右は、その中の「業苦の記録」と題する「七月三日」付の記の一部である。——「いよいよその關係の並々ならぬことが察知され」(中川)「秘密は露頭」(順)して、もはや事は二人だけの關係ではすまされなくなつたのである。とくにこの場合、夫があり子を持つ俊子の悩みは深刻であつた。

わが子らの怪しむ目をば憚りて君は閑遠になりにけらしな

母を思ふ娘はわれを罵りて蛇のごとしと言ひにけらずや

夫ばかりでなく、子らの知るところともなり、やがて世間の耳目にもふれることとなる。「わが子らの」の歌は、そうした中で二人の逢瀬がしだいにむずかしくなつた事情を読むことができる。二人は「橋の上……」以後、「今後は決して逢はぬこと」(「死

脉)を中川博士に誓言した。しかし、互いの愛情は深く、到底堪えることはできなかったのである。「母を思ふ」の歌は、そんな母を制止し、その母を思うゆえに、その相手たる「男性」にせまる娘のことばである。「蛇のごとく」とは、何とすさまじい物言いであることか。ともに、「裸心」(二十二年の部)から。

この恋を大凶事と誰れ彼れのささやくなべにいや愛しむも

順

妹のふみ取り出でて今宵も見つ君に逢ふなと書きてあるはや

同

はしたなき世の人言をくやしとも悲しとも思へしかも悔いなく

俊子

今日こそはわれにききたしとあらたまの母向ひたまふ吾の心を

同

右は、こうした二人に対する世の声、肉親の声である。順の歌は「裸心」所収。妹(蘆谷美佳子。庶子であった順にとっては母を同じくする唯一人の妹。鎌倉扇ヶ谷に居住。兄の影響で歌を詠み「心の花」に所属。)は兄の恋愛を耳にして思いとどまるよう便りをよこし、俊子の母は事の真意をせまる。そして、世の声、つまり批判の声が「世の人言」である。今はもう、「世間の批判にまともに晒された」「裸心」なのである。俊子の歌は「師弟の関係」(順が選んだ俊子の歌二十六首も収録されている)所収のもの。

四 自殺決意と未遂

相触れて帰りがたりし日のまひる天の怒りの春雷ふるふ
痛切な罪の意識を「春雷」に託して歌った、いかにも歌人川田順らしい大柄な歌である。『東帰』収録歌だが初出は「安楽寿院」で、二十三年三月、竹馬の友山本義路宛手紙に添えた一首だという。五月末日、その山本が突然現われ、この歌を口ずさんで、

天の怒りなどと弱音を吹くけれど、天は怒つてはいないよ。真実相愛する者が一緒になるのに、なんの悪いことがあるか。君の場合は相手の境遇上、決して美事善行ではない。けれども同時に非事悪行でもない。善悪以上か以下か、それはわからぬとしても、どうも致し方なかったことだ。

と。これは山本が語ったことばとして順が書きとめたもので、さらに続けて、「真実に生きて、貫くことだ」と励ましている。だがそれに對して順は、「友情はありがたいが」と前置きして、

××博士を裏切つたといふことが、どうしても苦しくて堪へられない。博士は、私にとつて、普通の友人でなく、私を尊敬し大切にしてくれた高潔な学者である。それを裏切つたのだ。しかも、かやうに苦しみながらも××さんへの愛を清算することは出来ない。ハムレットの叔父クロオディアス王が懺悔の祈りをした。××博士に對する私の謝罪も、その祈りの如きものだ。天は受付け下さるまい。

と述べる。歌の趣意はここに尽きている。純粹で一途な順の性格は自身を許すことができなかったのである。

一方、俊子は七月九日、単身中川家を出て母のもとに帰る。その

前夜、彼女は夫から「子供達のために家に留つてくれぬか」(「死脉」と言われ、一睡もできず真剣に悩んだ。が、もはやこれ以上「家庭外で秘密の愛を敢てすることの苦しみには心身共に堪へられず」、いずれは「この虚偽の生活を放棄せねばならぬ」のであり、「今日赦されて家庭に留まるとも、又日ならずしてかやうの事件が起るのに相違ない」ことを思つて、夫に対する「相すまぬ気持」、子供たちへの「愛着」は断ちがたいけれども、やはり母の家に戻る以外なかった、というのである。そして八月十三日、遂に離婚する。その経緯について、中川博士は前書で次のように記す。

皆の努力にも拘らず積んだり崩したり積んだりの態度が一年以上も継続するに至り、いつになつたらその関係が清算されるか分らなくなつた。周囲の人々もこれではと匙をなげた。改めて私方も一同集まつて、最早や、やむを得ずとして、遂に俊子を離縁することに言い渡した。

この時の様子を順は「離婚状に署名した時、××さんの手はふるへたのであつた。決してやすやすと署名したのではない」(「死脉」と書いている。

思えば二十数年前、この夫婦は仲の良い兄妹のような関係の中で結ばれた。俊子の実家は京都東山真如堂の東陽院で、彼女が十四歳の時、当時京大の学生だった中川与之助が下宿して一家に加わる。やがて、俊子十七歳の年、二人は彼女の「母上の熱望もあって『娘の初恋』をいれ」(「苦悩のする魂の記」)て結婚したのである。中川は経済学博士。戦後は戦時中の学問研究に感ずるところあり、と

して追放令を待たずに京大を退官。独自に研究活動が続けていた。主として労働問題を専攻。俊子去つてのち再婚。昭和四十三年八月一日逝去。俊子は「へたましひの花とも見えて白芙蓉今朝あかつきの庭に咲きたり」と詠んでその死を悼んだ(橋本喜典『わが愛する歌人』有斐閣)という。

さて、この俊子の中川家からの離縁は結果的には事件を思ふぬ方向へ向かわせて行くことになる。二十二年七月、二人の恋愛が発覚した直後の心境からすれば、二人にとつて離婚は望むところであつたはずなのに(二人の関係が露顕した翌日、順は中川に「この際、奥さんを離婚し、私の方へ下さいませんか」△「死脉」▽と申し入れている)、事がこのように正式に運んでみると、必ずしもそうではなかつたのである。とくに順の場合、あの「橋の上……」以後、胸中頓に芽生えた罪の意識はますます高まり、苦悩を一層深めていったとさえ見られるのである。「私は昨年初夏以来、真実にして不倫なる恋愛を続けて来たのであつた。私は世間普通の標準に従へば、所謂晩節を汚した者であらう」(「孤問録」と書いて、自分の恋愛を「不倫なる恋愛」だと言っている。その愛は真実だが、やはり道徳的には責められるべき点のあることを「世間普通の標準」に照らして見ないわけにはいかなかったのである。

——「私の恋愛を、過誤(?)を白眼視する者多く、友達さへ朝に一人去り夕べに一人去りしつゝある」(同前)状況、さらに俊子への「世間のこちたき人言」、周囲の非難、中傷などからますます自分を孤立させ、その苦悩はいよいよ深刻・悽愴なものとなつていっ

た。そして、身も心も疲れ果て、遂に「自己処罰」としての死へと我が身を向かわせて行くことになったのである。

げに詩人は常若と／思ひあがりて、老が身に／恋の重荷をになひしが、／群肝疲れ、うつそみの／力も尽きて、崩折れて、あはれ墓場へよろよと。（恋の重荷）

「群肝疲れ」「力も尽きて」、十一月三十日の夜、京都市内東山法然院川田家墓所へと歩みを進めて行った。……が、事は未遂に終わった。「たゞあたりは森閑として、落葉を踏む小獣の足音がしたのみに夜は更けて行つた。頭部に負傷した私は、愚息の周雄と一人の警官に救われて、山からおろされた。」（『川田順遺稿集香魂』）。それは二十三年十二月一日、ひとしお寒氣の身にしむ早晩のことであつた。

吾が歩むひとりの影の寒けれどやがては春の冬の夜の月

（「ちぬなしの記」）

これの世に再び生きてはじめての外出の道の冬の夜の月

（「裸心」）

たまきはる命うれしもこれの世に再び生きて君が声を聴く

（「裸心」）

自殺未遂直後の一連。第一首は、「吾が歩む」先になお続くであろう徹しい余寒にじっと耐えねばならない、とする寒夜孤影を歌つたものである。第二・三首はともに再生後の心境を歌つたもの。「再び生きて君が声を聴く」——単純で真率な詠みぶりのなかに心機一転の氣概が窺われる。

五 「東帰」の決意

前記「ちぬなしの記」は自殺未遂後初めて公にされた手記であるが、その中には、事件を知つた多くの先輩・知己が、心底から順を氣遣つてゐるさまがかなりくわしく記録されている。直接見舞いにやつてきたり、手紙をくれたり、また谷崎潤一郎のように「ツキナカゴロオモニカカリマス／ユーキアレ」と電報で励ましてきたりなどさまざまだが、そうしたなかでとくに次の一文は、順の心を大きく揺り動かした。下村海南の手紙である。

人間は限りある寿命を出来るだけ強く長く生きぬき、意義深き活動をなすべきである。君は今さうした天機にぶつかつた。今度の事件が重ければ重いほど之をテコにして大きな反動を仕遂げるべきである。（中略）私は繰返して言ふ。今度の事件を拍車として大きな目標を捉へ、彼岸に到達すべく精進せられよ。その道筋としては先づ居を移すべし。日本人の大熔爐たる大東京に來れ。君も取る年だから、相許し相助けあふ秘書が業績完遂の上に大きな条件である。もし今度の相手方なる女性がこの条件をも満足するならば何よりである。天分を持つ君にしてこの好機を逸せず、よき歌よき文を作るならば、ここに川田順はとこしへなるべし。順はこの手紙を読んで、「忝い激励」として「押戴いた」と後で書いている。

下村海南は、一般には政治家・言論人として知られているが、一方では佐佐木信綱門の歌人でもあつて、順にとっては同門でもあり、

また人生の師とも仰いだ一人でもあった。このような間柄であって
みれば、恐らくこの手紙は、十二月四日事件が明るみに出るや直ち
に書き送ってきたものと思われる。そうして順は、この中の「今度
の事件を拍車として大きな目標を捉へ」「その道筋としてはまづ居
を移すべし」という忠言を真剣に考え、その結論を下し、その決意
のほどをまず篤二郎に届けてよこした、というのが前記の書簡と思
われる。

順の書簡の「死に損ねが生き損ねをせぬやうに、努力工夫いたす
べく」「その一つとして居を東京方面に移すことに決心」は、まさ
しく海南の「今度の事件を拍車として……」「その道筋としては先
づ……」を受けて書かれたものであるといえよう。新生への足掛り
を、まず「東歸」によって試みようとしたのである。

なお、このような決意を促す助言をしてくれた人はほかにもいた
かも知れない。そうして、それらの中に周雄夫妻のいたであろうこ
とも想像できる(二四・一二・四付朝日の記事から)。しかし、管
見では右の手紙に見られるように、明確に、また直接にそのことを
働きかけている例はない。(歌友の五島茂が東京移住を言ってきた、
という事実はあるが、これは事件前のこと。後述)やはり、海南の
忠言の影響は大きかった、と見るべきであらう。

六 順と篤二郎

さて、それではこのような心機一転、再出発の決意をいちはやく
知らせてよこした篤二郎と、順との関係はどのようなものであった

か。次にかいつまんで記してみよう。

まきむくの弓月が嶽に鳴る神の葛城山にこだますらしも

順の第三歌集『山海経』(昭一二、順の歌人としての地歩を確かなものにしたいとされている代表的歌集)の代表歌とされる一首である。万葉集の「あしひきの山川の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に雲立ちわたる」「穴師河波浪立ちぬ巻目の由槻が嶽に雲居立てるらし」(いずれも巻七)などが作歌の意識に置かれた「緊張感に満ちた雄大な歌」(上田三四二)として知られる。大正七年七月末、順は「寧楽の寺めぐり」に出掛け、佐保秋篠の寺々に詣で、八月に入って長谷寺・巻向方面に赴く。右の歌は、この長谷寺・巻向で詠んだ「巻向村午後」と題する一連八首中の一首である。

ところで、この長谷寺・巻向の旅に、初めて尾山篤二郎が同行した。「篤二郎年譜」(『日本の詩歌7』所収昭四四、中央公論社)によれば、大正七年「三月、川田順を知る」と書かれており、また「川田順年譜」(『心の花』所収昭四一・六)には、同年「八月、尾山篤二郎と大和地方を巡遊す」ともあるので、二人はこの年三月初めて会い、早くも夏には「仲良く」連れ立って旅に出たのである。

続いてもう一箇所、順の「年譜」から引いてみよう。次の大正八年の項を見ると、「九月窪田空穂、松村英一米宅、共に観心寺、二上山当麻寺等に吟行す」とある。窪田空穂との初会である。空穂はその年の九月、松村英一を伴って加賀、越前、京都、大阪方面への二カ月にわたる旅行に出掛け、大阪がその旅の最後の訪問地であった。当時、大阪には空穂門の植松寿樹がおり、順は彼から空穂来阪

のことを知って宿の提供を申し出ていたのだという。そこで、空穂は大阪に着くや直ちに植松の案内で順宅を訪ね、そこに約一週間客として滞在、「年譜」に記載の観心寺、二上山等名勝古跡巡りに出掛けただけである。この二人の初対面のことは、のちに空穂が雑誌「日光」(大二三・六)「心」(昭四一・三)「短歌」(昭四一・四)などで繰り返し回想しているのでそれらに譲るが、順の歌風はこれを契機に大きく転回していくことになる。

短歌革新期の竹柏園の寵児らしいものになって、その浪漫的新風に慢心していた予は、大正八年晩夏の頃に来阪の窪田空穂氏と相識つて当時の写実的歌風に眼が開け、又、尾山篤二郎・松村英一・植松寿樹諸君と親交して、広く他流との交渉が始まった。

『川田順全歌集』(昭二七、中央公論社、以下『全歌集』という)の「後記」によると、空穂と「相識」ることによって新たな歌風の開かれたことを明言し、同時に、その頃すでに「十月会」を通じて空穂の影響下にあった篤二郎らとの、広く結社を超えた交わりの生まれたことを述べている。

こうして、空穂の影響を受けて誕生したのが前記『山海経』だが、篤二郎とは以後さらに親交、「親密なる詞友」(『全歌集』)としての関係が続く。とくに「詞友」としては、互いの作歌上の啓蒙もさることながら、むしろ順は、篤二郎の古典研究に注目し、その識見に格別の敬意を払っていたものようである。たとえば、研究著作物としての『西行法師評伝』(昭九)を高く評価し、とくにその中の西行出家の原因が、美福門院との悲恋にあったことを論じている

箇所など、筆者の管見に及ぶ範囲だけでも三たびも自身の著述で取り上げ賞賛している(『孤悶録』『葵の女』歌誌「芸林」)。余程のこの件については感服していたものと思われるのである。

そうして、大戦後国内各地を転々として容易に住居の定まらなかつた篤二郎が、二十二年十月、漸く前記書簡の宛先たる横浜市金沢区(當時は磯子区)寺前町を落着先と定め、次いで二十四年三月、順が同じ神奈川県に移住して来てからは、以前にもまして両者の往来は繁くなり、さらに親密の度を深めていったのである。

以上、このような順と篤二郎との交遊のあとは、なお二人の歌文や俊子の回想記などによっていくらかでも知ることができるが、紙幅の関係もあるので、ここでは俊子の書いた『黄昏記』(昭五八)から次の挿話を紹介するにとどめておく。

「……川田先生には若い頃から、一方ならぬお世話になりました。大正の中頃駒込動坂百二十番地に住んでいましたが、先生はよくお訪ね下さって、暖かい人柄を感じたものです。少ししたって私は尾山を残し、三人の子供と名古屋に移って、ピアノの教師をしました。すると先生は、「ピアノがなくては不便でしょう」と三百五十円を援助して下さいました。私はそれを元にして、當時五百円を買うことが出来ました。長男の直樹は、小さい時から絵が好きで……後に上野の美術学校に入学することが出来ました。その為川田先生には、学資の一部にと十年間も毎月々々十五円を送っていただきました。……」

昭和五十三年一月二十一日、川田順十三回忌の「偲ぶ会」の席上、

篤二郎の前夫人樫田文が語った内容を書きとめたもの。作歌と古典研究一筋に生きる篤二郎の純粹さに感じて、「ささやかなることをしたのではなかったろうか」と俊子は回想している。

注

(1) 出典は伊勢物語の「桜花散りかひくもれ老いらくの来むといふなる道まがふがに」によつたと順は記す(「心」昭四〇・四)。

(2) 関東へ歸る意だが、また順の第十三番目の歌集名でもある。昭和二十七年六月に刊行されたこの歌集は、二十二年一月から二十六年十二月に至る約五年間の作四五七首を収めたもので、その「後記」で「廿四年の春三月、私は四十年ぶりで、故郷東京方面へ歸住したのであつた。その記念として本集を『東歸』と名づけた。『東歸』といふ語は、唐の李涉の有名な七絶の中から拾つた」と述べている。

(3) 「事の真相や私の心事を世間の諸方面から質問され」た時、これをもつて「回答に代へようと考へてある」と述べている。「自昭和廿三年七月至十月執筆」とある。

(4) 順が死を意識するようになったのは昭和二十三年三月末頃からである。そのいきさつは「死脉」「宿命」「孤悶録」などによつてくわしく知ることができる。

(すずき、よしあき 神奈川県立衛生短期大学教授)